The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クオリティコントロールとしての「適正テスト」を考える(20230802)令和５年度教育メソッド・教育コンテンツ研究第1回勉強会資料
Author(s)	林田, 雅至
Citation	ISOコミュニティ通訳認証制度実績報告書. 2023, p. 26-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92568
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Ⅲ．巻末資料

序　論

- 外国語学習は学習言語・文化への適応（同化）・統合するものと歴史的に位置付けられる．現在のGlobal EnglishやGlobal Chineseも同様である．
- 外国語教育・学習を相対化し，媒介語＝学習者母語・文化の重要性を強調し，Contextual Sensitivityに基づく「双方向性運用能力 (interactive competence)」の涵養に力点を置いている．

2,000時間を超える外国語学習時間 I

- 従来「双方向外国語運用能力」は所謂「バイリンガル話者」でなければ，無理ではないかと思われてきた．しかし，CEFRによる能力（熟達度）別レベルが設定され，6段階の「中上級」にあたるB2以上になればinteractiveでdeductive（演繹的，応用の効く）なレベルまで達し，Contextual Sensitivity（文脈を汲み取る感性）に拠って，しかるべき訓練を重ねて「双方向外国語運用能力」は担保される．因みに，日本の大学設置審基準の「義務的」学習時間で，予・復習を含む約2,000時間（4年間：日本語を主とする文化事情講義は除く）を超える実践的な「外国語学習」によって，学習者母数の5% ほどが「双方向外国語運用能力」に達するとされる(仮説).

IELTS の バンドスコア	CEFR	能力レベル別に「何ができるか」を示した 熟達度一覧	TOEFL IBT [1]	英検 [2]
8.5 – 9.0	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。	C2 レベルは判定不能	ー
8.0 7.0 -7.5	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。	110 - 120	1 級
6.5 5.5 – 6.0	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。	87 - 109	準 1 級
5.0 4.0 – 4.5	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。	57 - 86	2 級
3.0	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。	40 - 56	準 2 級
2.0	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。	データなし	3 級 4 級

注記：以下の注を参照のこと。

上記の表は、IELTS、TOEFL、英検の試験結果が「ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）」のどのレベルに相当するかについて、IELST の運営機関(CESOL, British Council, IDP Australia)と TOEFL の開発者である ETS、公益財団法人 日本英語検定協会 がそれぞれ独自に実施した 3 種類の調査結果をまとめたものです。IELTS のバンドスコアがこの程度なら、TOEFL や英検ではこの点数になるというように、3 つの試験結果を換算するための表ではありませんのでご注意ください。試験のスコアを全般的に理解したり、CEFR との対比で試験スコアの意味を把握したりする際の参考としてください。

[1] 出所： ETS http://www.ets.org/Media/research/pdf/CEF_Mapping_Study_Interim_Report.pdf

[2] 出所： 日本英語検定協会 http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/

Aptis

受験者は「文法・語彙」セクションについては 0～50 点の数字で、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングのそれぞれのスキルについては、受けた試験の点数（0～50 点）と CEFR のレベル（A1～C）を表したスコアで評価されます。Aptis の結果は CEFR スケール（A1 から C2 の6段階）と点数で示されます。

（例：B2-80 点（IELTS 5.5～6.0 相当））

Reading – 30 min
Listening – 50 min
Writing – 50 min
Speaking – 12 min
Grammar & vocabulary – 25 min

2,000時間を超える外国語学習時間Ⅱ

- 下記表において，ロシア旧東欧圏東洋学部日本語科の例を示し，日本の学習時間と比較する意味で，対照させたが，個別に訊いてみると，自習時間はもっとやっていると言われた．ここでは，言語習得の基準参照値として6,750時間としているが，これは具体的に何を意味するかと言えば，関西空港に到着した留学生が，飛行機のタラップを降りたところから，流暢な日本語発話がなされ，書き言葉の漢字知識も相当学習済みであるという状態である．現代日本語・文化事情に関して，半年ほど予備教育を経て，大学院修士課程へ進学するイメージである．因みに，諸外国，特にアジア諸国と比較の上，日本で中高6年間でコミュニケーション能力が乏しいと批判され，一気に成績評価も伴うキッズイングリッシュの拙速な導入に至っている．

表まとめ：数量根拠に基づく「外国語学習」を考える

	授業時間	自習時間(大学設置審基準など)	修了単位要件総学習時間数	留学による学習4，800時間加算(1日16時間言語シャワー×300日)
日本の外国語学部系(4年間)：1コマ≒2h 上記実態：1コマ=1.5h	900 675(7.5s×4y×15回)	1，800 1，350(授業時間数：2倍)	2，700 2，025	7，500 6，825
ロシア旧東欧圏東洋学部日本語科(5年間)	2,250 (20s×5y×15回)	4，500(授業時間数：2倍)	6，750(言語習得基準参照値)	留学なし
欧州CEFR 言語検定試験(上級) ALTE － *The Association of Language Testers of Europe*（現在27言語）	900	1，800	2，700	7，500 CEFR： *Common European Framework of Reference for Languages* (ヨーロッパ言語共通参照枠)
ドイツへの移民に課される「社会的統合」(言語学習)CEFR中級	600	1，200	1，800	6，600(みなし留学) IATE：https://iate.europa.eu/home (European Union Terminolgy：欧州法言語翻訳サイト：26言語)
小学校～大学までの英語学習	736．4	1472．8	2，209．2	7，009．2
中等教育課程(英語)	628．4	1，256．8	1，885．2	6，685．2
日本の大学英文科(4年間)	900 675	1，800 1，350	2，700 2，025	9，385．2(＋6，685．2) 8，710．2(＋6，685．2)

2,000時間を超える外国語学習時間Ⅲ

- ここに示した中等教育課程（英語）の時間数は最も学習時間が費やされる所謂進学校の場合を参考としているが，一般的には，1,500～1,600時間未満である．2,000時間以下であり，数字の上で，所謂自発的な発話行為にまで至るとは考えにくい．母語形成獲得期が11～12歳であり，それまでに，英語教育(初等：324時間)の導入で，二言語学習（習得）を強いるのは，かなりの無理があると思われる．二言語が不十分に習得される（最悪の場合はダブルリミテッド［二言語制約］）懸念があることを指摘しておきたい．身近にそうした不幸な実例も知っており，学習時間が取り戻せず，市民生活は送れても，社会経済活動は送れない．急がずとも，18歳からでも外国語学習時間をきちんと担保すれば，必ず身に付くのである．

2,000時間を超える外国語学習時間Ⅳ

- 佐藤晶子他研究ノート「高等教育機関による多言語「適正テスト」実施についての考察」(2023)の表-1適正テスト得点の基本統計量（累計）に基づく「図-4合計得点の分布（N=425）」があるが，内数(表に出していない)になる阪大1年生(中高英語学習時間数：1885.2時間)「総合英語」(英作文担当：佐藤晶子：67.5時間＋1885.2時間＝1952.7時間(c.2千時間)について，3年間6セメ分受講生245名(複数言語専攻コース)の結果は，図-4「ふた山正規分布」の80-89点(CEFR：B2≒優)：51名(≒21％)，70-79点(CEFR：B1≒良)：92名(≒38％)で，残りの102名(69点以下≒可・不可)≒42%に上り，この最後の数字は看過出来ないヨチヨチ歩きの英語力，母語日本語力になる．

小森による、英語と日本語の組み合わせによる適正テスト 440 件超の有効であったデータ数 425 件の集計結果は表-1、図-3 で示す通りである。図- 3 は、集計結果を可視化し、得点区分における度数分布で表示した。

表-1　適正テスト得点の基本統計量（累計）

項目	合計
平均値	52.35
標準偏差	22.19
中央値	50.76
最小値	2.50
最大値	88.38
データ数	425

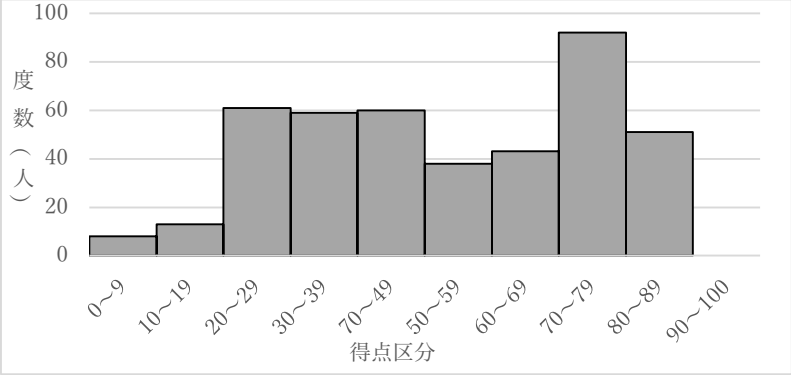

図- 4　合計得点の分布（*N*=425）

2,000時間を超える外国語学習時間Ⅴ

- 2019年G20(大阪)学内語学選抜で「適正テスト」（日英，英日版：総点評価基準はGPAに準拠，双方向性検証得点差は日英訳得点と英日訳得点の差）を実施したが，バイリンガル受検者でも，AA（左は総点80点以上；右得点差Aは2.5点以上5.0点未満）になり，SS（総点Sは90点以上，得点差2.5点未満），SAという「最高ランク」には入らず，一人は，留学経験がないにもかかわらず，通常の中高・英語教育を受けてきたが，そのバイリンガル話者と総点も得点差も遜色なしという結果となり，一方，この学生と言語学習歴が変わらず，所謂外国語検定試験は高得点同ランクであるのに，BD（総点Bは70点以上79点以下，得点差Dは10点以上）評価になった．ただ，こうした結果を見て，「適正テスト」は，既成の外国語検定試験で測れない実質的な「言語習得履歴とその運用能力」を知る手立てとして有効な手段であると自信を深めたのである．

１．『ISO13611:2014』認証授与

大阪観光大学　2021年3月18日　認証機関

『ISO13611:2014 通訳ーコミュニティ通訳のためのガイドライン』

2021年5月13日オンライン認証授与式

- 認証取得者　9名　（中国語−１、ポルトガル語−３、英語−５）
- （１）適正テスト　80%以上（CEFR　B2相当）
- （２）『ISO13611:2014』遵守調書
- （３）コミュニティ通訳資格に基づく実績ー証明書提出

審査

認証書授与

・プライベート認証
・大阪観光大学以外では、Institute of Science and Technology Austria（ ISTオーストリア：大学院教育を行う国立研究所）が『ISO13611:2014』認証授与を行っている。

2.　「適正テスト」の受検

「適正テスト」PPT提示：問題1から問題4まで(問題選択肢数現行140問：CEFR：B2相当80%以上：112問以上正解必要；所要時間90分，解答時限デジタル時刻掲示)：
サンプル：問題セクションⅠ：

ヒアリング資料(受検者には音声のみ提示，テキストは不可視)：3回音読(速度：通常，ゆっくり(単語，フレーズで区切る)，通常)：

An Intergovernmental Panel on Climate Change(IPCC) special report on the impacts of global warming of 1.5°C (one point five degrees Celsius)above pre-industrial levels and related global greenhouse gas emission pathways.

各自のノート・テイキングに基づいて，選択肢のa～dから正しいものを選び，解答用紙にアルファベットを記入しなさい．Google form形式で時限内解答提出させ，以降書き換え不可．ヒアリング中は未提示：

《選択肢》

1:　a Intergovernmental　b Intergovernment
　　c Under governmental　d Intergovernamental
2:　a Clymate Change　b Climate Charge
　　c Climate Changes　d Climate Change
3:　a Impact　b Impacts　c Empacts　d Inpacts
4:　a global warming　b globe working
　　c global warmming　d global heating

(以下省略)
実際は10設問程度

2.　「適正テスト」の受検

問題セクションⅡ：
受検者は各自ノートテイキングを参照しながら，下記をGoogle form形式で時限内解答：
下記の1～9までの括弧内に入れる適切な日本語を選択肢のa～dから選択し，解答用紙に記入しなさい．
穴あき文と選択肢は同一画面提示．選択肢が多い場合，常に穴あき文と区切り選択肢を時限に従って自動順次提示
(例：PPT穴あき文＋第１画面：選択肢1～9，同＋第2画面：選択肢10～18，同＋第3画面：選択肢19～27)
(　1　)に関する政府間パネル（IPCC）の(　2　)は，(　3　)のレベルを(　4　)(　5　)の(　6　)の(　7　)と関連する世界の(　8　)(　9　) に関するものである．

《選択肢》

1：	a　気候変動	b　天候変化	c　天候不順	d　天体変革
2：	a　特段報告書	b　特別報道書	c　特種報告書	d　特別報告書
3：	a　産業革新前	b　工業革命前	c　産業革命前	d　産業革命後
4：	a　超える	b　越える	c　下回る	d　上下する
5：	a　摂氏15度	b　接写1.5度	c　摂氏1.5度	d　華氏1.5度
6：	a　地球熱帯化	b　地表温暖化	c　地球温暖化	d　地球冷却化
7：	a　影像	b　打撃	c　投影	d　影響
8：	a　緑色部屋ガス	b　温室効果ガス	c　密室運動ガス	d　大気保温ガス
9：	a　排出経路	b　輩出経路	c　肺出経路	d　排出道路

実際はヒアリングボリュームはもっと多く，従って，日本語穴あき文も多く，選択肢も倍量見込み．
(担当：林田雅至　ISOコミュニティ通訳認証言語能力審査官)

3.　認知心理学の視座より

認知心理学では、人間の心的活動を情報処理プロセスとして捉える

情報の入力、貯蔵、操作、検索、照合、出力・・・

心的辞書（mental lexicon）

長期記憶内に保持される言語知識の集合体
単語の形態、音韻、意味、などの属性情報や統語、語用などの文法規則を含む

意味ネットワーク（semantic network; Collins & Loftus　1975）

言語を含む知識表象は概念同士が意味的関連性によりリンクし、ネットワーク構造を形成している

ある情報が処理される　⇒　概念が活性化する　⇒　活性化がネットワークに拡散
⇒他の概念が活性化しスタンバイ状態に　cf）プライミング効果

各概念の「名前」は音韻的な関連性によるネットワークを持つ

(Collins & Loftus, 1975, p.407)

3.　認知心理学の視座より

解答意図の符号化

解答言語の
語彙アクセス

解答の選択

発話・書字

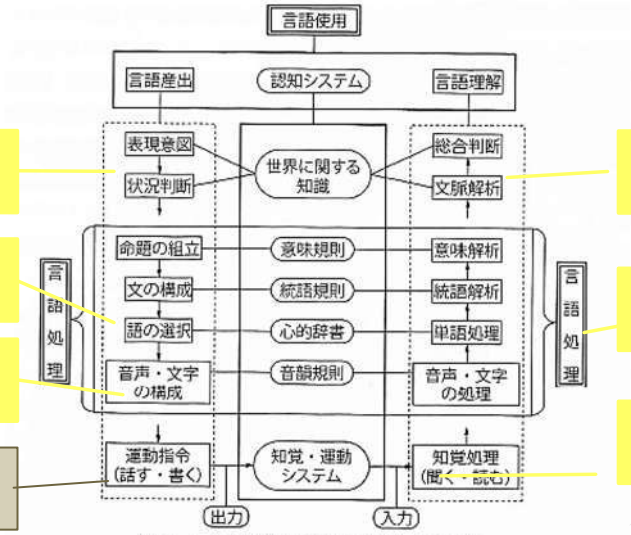

図 11-4　言語使用（産出と理解）のモデル

問題意図の解読

提示言語の
語彙アクセス

問題音声の提示

（坂本, 2014, p.192）

5．まとめ

1．高等教育機関による多言語の認証授与

・2021年5月13日『ISO13611:2014通訳ーコミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与を行った。

・日本で初めて9名（中国語1名、ポルトガル語3名、英語5名）の通訳者が『 ISO13611:2014 』の認証を取得した。

・オーストリア工科大学が『ISO13611:2014』認証授与を行っている。

2．言語運用能力を測る「適正テスト」

・受検について―「適正テスト」は2言語の双方向運用能力をチェックするためのテストである。

『ISO13611:2014』認証制度を通して、言語学習において双方向運用能力が身に付く良い機会となる。

・認知心理学の視座より

本テストは、言語理解・言語産出プロセスを反映し、発話の前段階までの言語処理能力を測定するものである。

Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テスト

主催：京都外国語大学
共催：ISO コミュニティ通訳認証言語能力審査官
　　大阪大学名誉教授　林田雅至
とき：令和 5 年 5 月 1 日(月)15:00～16:30
ところ：オンライン（ZOOM）

言語能力カルテ

ISO コミュニティ通訳認証言語チェック・テスト「適正テスト」：採点基準：

総点 100 点(%)として，90 点以上を S 評価，80 点以上を A 評価，70 点以上 B 評価，60 点以上を C 評価とし，59 点以下は D「不適格者」とする．また，以下，個別の百分率についても，分野別領域・能力の評価の目安となる．
また，Contextual Sensitivity のバランスを示す得点差を 0 点から 0.25 点未満を S 評価，0.25 点から 0.5 点未満を A 評価，0.5 点から 0.75 点未満を B 評価，0.75 点から 1.0 点未満までを C 評価．
1.0 点以上の差のあるものは D「不適格者」とする．

受検番号：202305011　氏名：
総得点：90.0 点(評価：CEFR：C1 以上)
問題 1：**気候変動・生態系保全：**英語ヒアリング：　0.8 点(80.0%)，日本語訳：0.94 点(94.0%)
問題 2：**自然災害・紛争：**日本語ヒアリング：1.0 点(100.0%)，英語訳：0.86 点(86.0%)
問題 3：**感染症：**英語ヒアリング：0.9 点(90.0%)，日本語訳：0.95 点(95.0%)
問題 4：**観光：**日本語ヒアリング：0.93 点(93.0%)，英語訳：0.75 点(75.0%)
ヒアリング：
英語ヒアリング：1.7 点(85.0%)
日本語ヒアリング：1.93 点(96.5%)
翻訳：
英語訳：1.61 点(80.5%)
日本語訳：1.89 点(94.5%)
英語から日本語へ：3.59 点(89.8%)
日本語から英語へ：3.54 点(88.5%)
両者の得点差：0.05 点(S 評価)
全体評価：SS

2023 年5 月 18 日
ISO コミュニティ通訳認証言語能力審査官
大阪大学名誉教授　林田雅至（公印省略）

「適正テスト」のすすめⅠ

- 「適正テスト」（日英，英日版）は，京都外語で他言語版も含め，組織的な開発作成がこれから始まり，今後「コミュニティ特論」を通した履修科目受講生によって，「適正テスト」が継続され，データ蓄積と「言語能力カルテ」は厳重に保管され，分析も進められる．実施言語は京都外語が抱える言語のみならず，アジア諸言語にも拡大が見込まれる．京都外語専門学校で学習される「タイ語」「インドネ語」「ベトナム語」からベトナム語版「適正テスト」は2022年度開発作成され，今年度以降実施される見込みである．

「適正テスト」のすすめⅡ

- オンライン受検の利点を生かして「適正テスト」多言語版について，本科研の京都外語のみならず対外的にその受検を進め，データ蓄積と「言語能力カルテ」の厳重保管の上，今後本科研参加研究者の英知を結集した優れた科学的分析を行うことで，学内のみならず，当該言語学習の理想的な教育体制下の授業運営に資するものとなればよいと考える．